ストレスコーヒー

川路　新吉

ストレスコーヒー

「コーヒーどうぞ」
　いつものように同僚のサトナカさんがコーヒーを出してくれた。
　ありがとうとお礼を言って、タナカはコーヒーをすする。
「うわ、苦っ」
　タナカはコーヒーのあまりの苦さに思わず大きな声を上げてしまった。
「先輩、おおげさすぎますよ」
　隣に座る後輩のサトウがそう笑う。しかし、コーヒーをすするとサトウの顔も同じように苦い顔になった。
「確かに苦いですねこれは」
「どうしたんだろうな、これ」
　コーヒーを入れてくれたサトナカさんを探すが、あたりに姿は見えなかった。
「あ、そういえば」
　サトウは何か思い出したように言った。
「昨日、サトナカさんに頼まれてコーヒー豆買ってきたんですよ」
「おまえが？何で」
「ちょうど用事で外でるときにコーヒー豆買ってきてって言われて。何でもいいからっていわれて」
「いつまでも使いっぱしらされてるな、おまえは」
「で、適当に入ったコーヒーショップで買ってきたんですけど、今思い返すと店員が変なこと言ってたような」
「変なこと？」
「これは、淹れる人のストレスで味が変わるコーヒーです、って」
「ストレスで味が変わる？」
「ストレスが強いほど苦くなるってことですかね」
「なんだよばかばかしい」
　その日、コーヒーについての話はそこまでになった。
　しかし、次の日、そしてまた次の日とサトナカさんが出してくれるコーヒーは日に日に苦くなっていった。
「う、今日はまたいちばん苦いな」
　これ以上は寄せられないと言うほど眉間にしわを寄せてタナカが言う。
「これはちょっと飲めたものじゃないですね」
　サトウもつらそうな顔をしてマグカップを机においた。
　タナカが周りを確認して小さな声で言った。

「もしお前が言った話が本当なら、サトナカさん大丈夫なのか？」
　コーヒーが淹れた人のストレスに応じて味が苦くなるという話だ。
「それなんですけどね」
「ん、なんかわかったのか」
「ちょっと噂を耳にしたんです。サトナカさんひどいセクハラをうけてるらしいって」
「まじか。誰にだ」
　サトウは顔を上げて部屋の奥の方を見る。その先には係長がいた。
「係長が？」
「いや、ぼくもまさかとは思うんですけど」
　二人がこそこそと話していると、係長が二人の視線に気づいた。
「なんだ、どうかしたか」
「いや、なんでもないです」
　タナカの声は少しうわずっていたが、係長は気づかなかったようだ、そうかと言っただけだった。
　その後、係長は身支度を整えると
「今から泊まりで出張で明日いないから。あとよろしくな」
　と二人に告げて部屋を出ていった。
「結局、本当のとこ、どうなんですかね」
　サトウが言った。係長がサトナカさんへセクハラをしているかどうかということだ。
「うーん、わからねぇ」
　タナカはただそういうしかなかった。

「コーヒーどうぞ」
　次の日、またサトナカさんがコーヒーを持ってきてくれた。
「サトナカさん、ちょっと」
　タナカはサトナカさんを呼び止めた。
「どうかしましたか」
　セクハラを受けているのかどうか、それを聞こうとした。
「いやごめん。なんでもない」
　しかし、結局は聞けなかった。
「変ですよタナカさん」
　サトナカさんは笑って去って行ってしまった。
　タナカは目の前におかれたコーヒーをにらむ。そして意を決してすすった。
「なんだこりゃ」
　思わず大きな声がでた。
「どうしたんですか先輩」
　隣のサトウがびっくりして見ている。

　タナカはコーヒーをすすり、もう一度しっかりと味を確かめた。
「あまい。めっちゃあまい」
　それを聞いて、サトウもコーヒーをすする。
「あまいですね」
　サトウも同じようにびっくりしている。
「いったい何があったんだ？」
「今日係長がいないからですかね」
　係長は泊まりで出張だ。もちろん会社には来ていない。ストレスの元である人物がいないならば、それは多少気は楽になりはするだろう。
「にしても、こんなに変わるものなのか？」
　タナカは腑に落ちなかった。それほど、コーヒーの味は昨日までと違う。違いすぎる。
　見るとサトウも腑に落ちない表情をしている。
　コーヒーの味の謎はますます深まったように思えた。そして、謎は解明されないまま、そのまま退社の時間をむかえた。

　タナカが自宅に帰るとすぐ、携帯が鳴った。着信を見るとサトウからだった。
「先輩、テレビみてますか」
　サトウの声はずいぶんあわてている。
「どうした。いま家に帰ってきたとこだよ」
「テレビすぐにつけてください。ニュース、ニュース番組」
　言われたとおり、テレビをつけてニュース番組にチャンネルを合わせた。すると、テレビに見知った名前が表示されていた。
　画面のテロップに係長の名前がある。そして名前の前には「被害者」と書いてあった。
　混乱しそうな頭をどうにか落ち着けて、状況を把握する。
　キャスターは淡々とした様子で「速報です。先ほど〇〇市のホテルの一室で変死体が発見されました」と伝えていた。
　係長は殺されてしまったようだ。出張先で、誰かに。
　同じ番組を見ていたのだろう、ニュースが一段落すると、電話口からサトウの声が聞こえてきた。
「コーヒーの謎、こういうことだったんですかね」
　サトナカさんは係長にセクハラを受けていると噂されていた。
　そしてその係長が死んだ。
　ストレスの元となる人間がこの世から去ったのならば、ストレスもなくなるだろう。
　もし係長とサトナカさんの間に噂されているようなことがあったならば、今朝のコーヒーがあれほどあまくなっていたのもうなずける話だ。
　もう自分を苦しめる存在はいなくなってしまったのだから。
　そこまで考えて、タナカはふと寒気を感じた。

「ちょっとまて」
「どうしたんですか」
「なんでコーヒーは苦くなかったんだ」
　一瞬間があった後、電話の向こうでサトウが言った。その声には、何でわからないんですか？というあざけりの色が混じっていた。
「それは係長が死んでしまっていたからなんじゃないんですか」
　タナカはそれを聞いて思わず舌打ちをする。なぜ気づかない。
　俺たちは今まで係長の事件のことを知らなかった。会社でもそんな話があがらなかった。そもそも、さっきニュースで速報と言っていたではないか。
「なんで今朝の時点で彼女の淹れたコーヒーはあまかったんだよ」

ストレスコーヒー

http://p.booklog.jp/book/41590

著者 : 川路　新吉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/41590

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/41590

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.